



き だ く す い ち

木田久主一（鳥羽市長）

事業所ごみの減量化や不法投棄防止対策の強化など、鳥羽の美しい自然を守るために環境先進都市としてのまちづくりを目指している。



こ じ ま

小島あずささん（JEAN

クリーンアップ全国事務局代表）
年2回、全国一斉海岸クリーンアップキャンペーンを展開。漂着ごみを調査し、海のごみ問題を根本から改善することを目指している。



い し は ら よ し か ず

石原義剛さん（海の博物館館長）

1971年に「海の博物館」をオープン。以来、海に関するさまざまな情報を全国に発信しながら海の環境保全に取り組んでいる。

環境月間特別企画「環境でトーク」

漂流・漂着ごみと環境保全

6月の環境月間にちなみ、今年も「環境でトーク」を実施しました。

10月には、鳥羽市を会場に「'08海ごみサミット・鳥羽会議」が開催されます。そこで今回は、市長と、環境問題の中でも特に、海の環境保全に積極的にかかわっている石原さん、小島さんにお話をいただきました。

竹内 最初に、みなさんと漂流・漂着ごみのかかわりについて伺います。

市長 鳥羽市は、リアス式海岸や離島という素晴らしい自然環境に恵まれています。一方では、ごみが引つかりやすいという特徴があります。

台風や洪水によるものだけでなく、生活ごみも含めた大量のごみが海岸や砂浜に漂着するという状況です。

それによって、船が航行できなくなったり、漁業者が仕事ができなくなったり、ノリ養殖などに被害が出たりします。観光業にも影響が出ます。

これらのごみの処理は、水産関係のかたがたがせざるを得ないという状況にあります。

また、野外で焼却ができないこともあって、ごみが処理されずに野積みされているということも起きています。

誰がそのごみを捨てたのか特定できない以上、地方だけでなく国もその責任を持つてほしいと考えています。

そういう中で、昨年度から環境省が中心となって漂着ごみの調査を行うことになり、太平洋側では、唯一鳥羽市が選ばれたことに期待しているところです。この調査結果を

基に、きれいな伊勢湾になるよう積極的にごみ処理対策に取り組んでいきたいと考えています。

石原 昭和46年に海の博物館をオープンして、SOS運動を始めました。「SAVE OUR SEA」を、わたしたちの命の海を救おうという運動です。そのころ、伊良湖水道でタンカーが衝突して廃油が流れ出し、鳥羽の海岸線も真っ黒になりました。それを回収するのに漁師はもろろん、市民総出で大変な騒ぎだったんです。少し経ったら、今度はそれが真っ黒な廃油ボ



進行役を務める竹内環境課長

ールになって流れてきた。今考えると、海のごみの最初はこれでした。

その当時は、今のようになり形ごみの認識は薄かったと思いますが、高度成長が進むにつれてプラスチックのようなごみが出るようになりました。

今から15年くらい前になるんでしようか、大雨で宮川が氾濫して、おびただしい量のごみが桃取の港から答志島いっぱい流れてきました。

あのときは、すごいショックを受けました。たぶん、鳥羽市民のみんなが、ほとんど同じような感覚を持ったのではないかと思います。市民が参加してごみ問題を考えなければならぬという時代が始まった気がします。

その中で、ごみをどうやって少なくするかということ展示や広報を通していろんな形でキャンペーンを続けてきました。



発生源は 人間一人ひとりの自己責任だ という感覚を持つてほしい

小島 19年ほど前から海のごみを拾うだけの清掃活動では、

どうしてもまた流れるごみが来てしまうということで、それぞれの場所にどんなものがあるのか調査しようという取り組み、調査を通じて意識啓発と結果を基にゴミを元から出さないための方策を考えようというアメリカで始まった民間活動の日本の窓口として活動しています。

わたしも、家族で海水浴に行くと、水着が廃油ボールで汚れたことがあったのを覚えています。ただ、そのころは今のようには腐らないごみが海岸に大量にある時代ではなくて、わずか30〜40年の間にずいぶん変わったんだなあと思いますね。

石原 鳥羽市は、海が都市やよそから流れ着くごみの集まり場になっているということ。それと、観光地であるということから発する特別なごみの

問題を抱えていると思います。

一番初めに取り組んだのがカキ殻の問題でした。カキの殻が、産業廃棄物ということで捨てるのができないので、肥料に使えないかなど新しい使い方を考えました。最初は、なかなか大変でしたが、年月を経て、いろいろな解決法が出てきました。その次に、生活ごみというものをみんなが考えていかないとだめだという考え方が出てきて、海岸線のごみ調査を住民を巻き込んでやろうということをして10年位前から始めてきました。

小島 90年に団体を立ち上げて活動を始めたときから、海に流れ寄ってくるごみがテーマでした。拾うだけでなく調査するということで、もうひと頑張りして、それを基に根本的な解決を目指せば何とかなるんじゃないかと、その程度の気持ちで始めました。やってみると、海辺のごみ

は、レジャーや漁業のごみではなくて、むしろ川から流れてくるものが多いことがわかりました。全国ネットワークで活動していると、地域によ

っては外国のごみが来ているとか、上流域からのごみでお困りだったり、いろいろな声が聞こえてきます。同じ日本の中でも、ところ変わればごみの種類も違うのだなあという認識が出てきたところに、特に離島を抱えている地域が非常に深刻だということがわかりました。拾う人手もないとか、処理が十分できないとか、本土まで運ぶお金まで島

元から出さないための方策を 考えないと 漂着ごみはなくならない

で持たないといけないとか。でも、こんな地元のかたの声が国まで届かないのが実情です。これはみんなで現場を見に行きましようということで、仲間と思い付いて始めたのが「海ごみサミット」なんです。

竹内 漂流・漂着ごみを減らすにはどうしたらよいのか、また、漂着ごみの処理責任はどこにあると思いますか。

石原 排出源をいかに少なくするかという問題と、不幸にして出てしまったごみをどうやって回収するかという二つの問題です。排出源は、大きく言うと企業と市民ですが、企業の方は、今やリサイクルなどで、ごみを排出しない方向にかなり来ています。それに対して市民の方は、まだごみをどんどん出しています。家庭から出る残飯率が食べる量の20%くらいあるというところです。今は飽食の時代と違って、たくさん買って残して

捨てる。このところをどうやって考えていくかですね。

捨てられたものについては、目に見えるものは、かなり拾われる時代になったと思います。問題なのは、鳥羽の港を埋め尽くした枯れ木や流木など、森がきちんと管理されていないことによるごみですね。それと、海の底に溜まっているごみが、手付かずだということなんです。いくら陸がきれいになっても、ちよつと台風が来たら、波でそれが上がってくる。漁師さんは困っていますし、水産資源に影響を与えています。鳥羽の海岸線はいつもそれで汚れています。大変な量だと思えますが、認識してもらったところから始めていかなければなりません。海底のごみを回収してもらったら、それに対してある程度の費用も払うというようなことを国レベルでやってほしいですね。



サミットを 漂流・漂着ごみの問題解決に つなげたい

小島 海のごみは、原因者の特定が難しいので、ある程度きちんとしたモニタリングのようなことを続けていく必要があると思います。

海辺にごみを拾いに行くのは、ちよつと呼び掛ければ来てくれると思いますが、沈ん



だごみや流れているごみは、きちんと科学的な調査も含めて国なり、学術研究機関がやってもいいですね。

それと、人が簡単に拾いに行けないようなところに残されたままになっているごみが、どんどん細かい破片になって、次の段階の環境汚染になりつつあるのではないかと。そういったことの実態調査も専門的なかたにしっかりとやっていただくことを望んでいます。

市長 災害によって山や森から流れ出るごみについては、やはり森の管理、国土の管理をしつかりやるのが大事だと思っています。民間とか漁協などでも山に広葉樹を植えるなどの活動をしていただいています。

自然破壊をしながら安い外国の材木を入れて、日本の森が放置される。そこでも自然破壊が起こるといったことがあると思いますので、山で生



計が立てられるような政策を国がやらなければいけないと思います。

それから、生活ごみの漂着については、そのほとんどが陸上で捨てられ、風とか雨で側溝へ流れて、それが川を通じて海へ流れてくるということとを考えると、やはり陸上でごみをしない、されたごみは拾うということが必要なんじゃないかと思っています。

鳥羽市では、環境パトロール車を走らせて毎日ごみ拾いをしていきます。景観をアップするだけでなく、海へ流れていくのを防ぐという意味でも効果があると思っています。

それから漂着ごみの責任は、やはりみんなにあるわけですから、そういうことを考えると国でしっかりと責任を持つてもらいたいと感じています。

竹内 「海ごみサミット・鳥羽会議」が、10月に鳥羽市で開催されますが、それぞれの立

場で、サミットへの期待を聞かせてください。

小島 まず、初めて太平洋側の離島ではないところで、でも島を抱えているところで開催すること、大規模人口圏を近隣に抱えているところでの開催ということで、非常に期待を持っています。

海のごみ問題は、ようやくここ近年マスコミなどで報道されるようになりましたが、日本全体では、自分たちのごみも海に行っているかもしれないという意識がまだまだ希薄です。鳥羽会議で、わたしたち一人ひとりが発生者で、自分たちも責任を持つ問題だということを発信していけたらと思っています。

石原 海の博物館でも、サミットに合わせて今の海ごみの現状を特別展示したいと考えています。できれば、今回のサミットで、発生源はわれわれ人間一人ひとりの自己責任だという感覚をもっとしっかりと持つてもらえたらと思います。ごみの発生が少なくならない限りは、いつまでもこの問題は続いて、深いところで地球温暖化の問題にもつながっていきます。

市長 これまでは日本海側の離島を中心に開催されてい

て、太平洋側では初めてというところで、市としても海ごみサミットの実行委員会を設置して歓迎の準備をしています。サミットでは、漂流・漂着ごみの原因を明らかにしてごみを無くすこと。そして、漂着ごみの処理の問題解決につながるような方向性が出せたらと思っています。

鳥羽は、国立公園だと言いつつ、ごみがいっぱいいたというところでは、マイナス面も大きくなります。サミットを通して改善できれば、市の産業の発展に大きく貢献できると思っています。



対談のあと、'08海ごみサミット・鳥羽会議に向け第1回実行委員会が開催されました。
くわしくはホームページ（アドレスは最終ページに掲載）をご覧ください。